

関東

共産主義青年同盟結成準備大会 議案草案

2051-

2月16日
総本大会
議案

2051

- 目次 I 共青結成の現在の意義
- II 共青の政治的結集点 — 共青の政治的展望
 - イ 世界一國同時革命の展望 (F. D. I.)
 - ロ 安保斗争を世界革命戦争への飛躍とせよ
 - ハ 安保斗争への労働戦線の斗い
- III 共青の組織について
- IV 規約
- V (別稿) 当面の情勢と任務

10月

中月

2月16日
2月27日
3月
3月16日

2051

- * 4.26.4.28 主了
- * 70斗
- * 古典
- * 他南

1969-2-16

介とした未分化な結合関係や党と大衆の無媒介な直接的結合の克服についてである。同盟はこれに対しては細胞活動の確立を基礎とした、共産結成とフラクシヨン活動とグループ活動の区別と統一をテコに、分離―結合する媒介的結合様式をもつて大衆運動主義や党派間い込み主義の二傾向を乗り越えつつある。

共青と共産主義者同盟との関連について

共産主義者同盟と共青との関連は結論的には分離―結合の關係に立つての自主的組織であり、又並に共産主義者同盟の革命斗争推進の助手であり、党の予備軍としての位置を保持する労働者人民に対する党のプロレタリアンゲモノの媒介的荷り手である。

共青は階級形勢そのものの観点に立つ場合、反帝統一戦線をリウイ工下に画化する階級階層を越えた国際的青年運動の一環としての日本青年層の独自の統一体として、大衆的、戦斗的な自主的組織である。我々は共青を青年層の自發性、創造性、行動力、不屈の英雄的精神等を最大限發揮せしめる自主性と尊重しなければならぬ。又、全やる意識や層の青年を結集せしめる振幅を持ったゆるい組織形態として確立しなければならぬ。だが階級形勢が共産主義運動と共産主義政党内に媒介するに依りてこの青年層の自發性、行動力、不屈の英雄的助手として予備軍としての不可分一体の關係に立つのである。

亦げながら、かかる先進的若年層は各地域、職場、学園等の在会―政治活動がそれから生まれ、内的にその運動に燃起され、階級の成熟に直接に規定されたその限りで、普遍的な利害を代表する活動形態をもった階層前衛活動とは異なり未熟な限界を持つ存在だからである。又、前衛活動、かかる特徴を持つ広汎な戦線と、青年層と結合する媒介し先進的活

動家層と分離―結合することによつて、自らを純化し、内面的外見的強化をはかり得るし、先進的活動家大衆に共青とその拡大を媒介にハゲモノを定着化せしめねばならぬ。

「帝國主義論」「全權力論」「体制国家論」
を存在している。我々はこの二つの傾向を否定
する。

我々の主張は次の通りである。現代世界の基本
的法則は帝國主義の不均等発展である。「列強
国家の成立・併存は、この法則性を受けてはいな
い。」「列強国家も名目てこの法則は基本的に尊
厳されている。しかしながら「列強国家の存在
は、ブルジョアジーに絶大な利益を過剰的につ
かり、国際的援助による統一世界市場崩壊の危機
の引きのびし（ホンドル格、フランク格の各
国ブルジョアジーの援助をみる）、NATO空位
のとき反革命同盟成立を促している。

⑤現代世界は、帝國主義の運動法則に規制される
。その一環に組み込まれた列強国家の帝國主
義同盟下であるが故に、不断に歪曲されざるを
得ない中であらう。その口實「コミュニン型国家復
活」世界革命の根拠地國家を維持復活させる運動
との首謀的統一性としてある。

そのように捉えなければ、我々は契機にして
始った帝國主義同盟抗争の「中ノ論争」として期
待された列強国家間の対立とな統一的に理解さ
る事は出来ない。「中ノ論争」に於ける列強国
家の對路をめぐり論争は、米帝の一元支配な
ら、西歐帝國主義、日帝が抬頭し、なちかつ後進
國階級斗争が激化する中で、後進國階級斗争への
隔り方をめづって始った。

しかし一端始、討論争い斗争は、資本主義体制
対「社会主義体制」という図式を固定し、主要
敵、米帝をたたく論には、他帝國主義とは異なす
るところ。中国流「中印地帶論」の修正をせま
る内容を持つてきているのである。

⑥(7)を示したように、我々は世界同時革命戦略
をたてる為にも、現代帝國主義の危機の分析なら
出発しなければならぬ。

現代帝國主義の危機は、一般的な経済危機とし
てではなく、過渡期世界の矛盾（前述した通り）
列強國家の地理的拡大、強大化を媒介としてN
ATO、中東、反革命同盟が成立し、平時に於て
も不断に「軍事」の対峙となり、そのことを軸に
諸階級諸層の分離を不断に起こさざるをえない
に規定され、さむねて政治危機と結合して発現す
る。しかも帝國主義列強の生産構造の同質、平等
化と列強間の起意的相互競争政治が一掃無双

その矛盾の危きを急激化し、永続化させていく
のである。

⑥現代帝國主義の危機の構造は、第二次大戦後
統一市場再建の性格に規定されていく。
第二次大戦を経て、統一市場は崩壊を遂げ、米
帝を中心として統一市場は崩壊した。これは米帝の
帝な諸列強にドル競争を行い、ヨーロッパ、中
の再建を支えた。

以上の下部構造に結合して、あるいはこれを
証するものとして、NATO、中東、米帝を軸
形成された。

帝國主義の不均等発展はもうその下に
行断の危機（米帝と敵、トル格、ホンドル格、
危機として表現されていく）を不断に引きつら
る。「列強國家の存在」に規定され、列強の競争
スチートに政治軍事化せず、競争を目的とする
と定められてきた。

しかしこの過程を促進したのは、米帝に
に先行した超重工業化（技術革新の皮）を、西歐
日帝が吸収し追いついていく過程、即ち米帝資本
主義の生産構造の競争的構造と同質的構造に
化していく過程だったからである。

このことがブルジョアジーの意識的対応をも
つて統一市場の行断のひびきを生じつつも、
なつ、西歐日帝に於て設備投資主導型の生産構造
を促進し、先進國間水平競争を拡大させてきたの
である。

しかし今までの年をみて、この過程は終焉し、
今や、帝國主義諸列強は、同質化し、均質化した
危境を内包している。

(1)この均質化し、永続化した危境の中で、各
ルジョアジーは、統一世界市場の行断を先取りし
て、市場拡大の侵略、反革命と国内抑圧（国内
ブルジョア独裁体制確立と経済統制的支配の確立）
をもたらしつつある。

(2)この危境は、米帝に相手をかけている
のが、後進國、民族解放、社会主義革命の勃
る。ベトナム革命を頂点とする後進國の激動は、
帝國主義の市場回を打ち破り、更に新技術革命、
反革命策動にも先制的な攻撃を遂げ、米帝に
て、帝國主義本國の階級的激動をもたらし、
巨大なインパクトをたっている。

更に、今日のアジア、アフリカ、中南米の
解放斗争は、危境の帝國主義を揺るがしている。

るのみならず、中ソ分裂を以て出、ソ連の平和
共有路線の破壊をほくろし、更に、中国を、世界
革命の根據地へ転回せんとする主要な要因とな
っている。だが、この民族解放斗争も、巨大な生
産力をもつ、先進国革命と結合しない限り、社会
主義へ平和的進歩を歩むことはできないのである。

(13) (11)に示された反帝国主義の先行的攻めの武器
こそ、反革命同盟「NATO」、AMPであり
その再編強固に他ならない。「労働者」国家と対
決し、後進国革命を鎮圧する武器のみならず、フ
ランス五月革命をみれば断然としていよう、
反革命同盟は先進国階級斗争鎮圧の武器でもある
からである。そこで「NATO」、AMPの再
編強固とは勃然たるべきである。日帝、西独等々
の反動的勢力を打ち固めるものである。

(14) 三プロットの階級斗争の提議こそ中に解決し
これを鎮圧する武器である。NATO、AMP
こそこの再編強固の粉砕、及び危殆の帝国主義に違
い立ちをかけ、危殆を拡大、増大させている「後
進国階級斗争勝利」策中「ベトナム革命勝利」こ
そ、今日に於ける三プロットの人民の共通の任務
でなければならぬ。帝国主義のプロレタリア
ートは、この共通の闘いと結合して、「自由帝国
主義打倒」を唯一の目標とするのである。

(15) 以上のような帝国主義の先行的攻めに対し、
帝国主義の「プロレタリアート」が、ベトナムを中
心とする後進国階級斗争、「労働者国家」の闘いと
結合し、三プロット人民の「NATO」、AMP
の粉砕、ベトナム革命勝利」の意志をもった斗
争を激化させ、帝国主義の一面を打破するまで、
帝国主義の同質化し、永続化した危殆は「一党一
かつ」同時上「世界革命への展望を生み出すので
ある。

(16) 我々はここで「労働者」国家について若干ふれ
ておかなければならぬ。我々が、帝国主義包圍下の
過渡期社会に疎外された「労働者」国家に課する任
務は次のことである。

- ① プロレタリア死守ー コミュニオン型国家の堅持
- ② 世界革命の根據地作り

①②は相互連動的なものであり、本質的に同一
のことである。中国がベトナム人民解放斗争とい
かに支援するのみ、という向はから、如きは平和
共有政策たる「平和五原則」から脱するとともに、
同時に、国内において、文化大革命を、(17)

るべきであったように、「労働者」国家は帝国主
義の包圍下であり、不断に軍事制圧力をつけてい
るが故に、世界革命を指向する指針即ち目的意識
的指針を必要とする。スターリンは、後進国プロ
レタリアートだけでも「社会主義」に到達しようとい
う誤る理論の下に、世界革命を放棄し、帝国主
義の共産党にソ連防衛をオールの任務として、押
しつけ、30年代以後のプロレタリアートの闘いを
挫折させた。

我々は「労働者国家の党官僚打倒」を掲げ、こ
の「党官僚」にスターリン官僚の下に「労働
者」国家人民抑圧の武器と取している「ソルシヤ
」条約軍解体」を通じて、この武器を世界革命へ打
けての「赤軍へ全人民の武装で再編」することを
要求するのである。

(17) 以上のような三プロットの階級斗争を結合せ
せる統一スローガンこそ、帝国主義諸列強打倒、
NATO、AMPの粉砕、ベトナム革命勝利」で
あり、帝国主義の同質化し、永続化した危殆の一
角を打ち砕いた「内戦」をへ世界革命闘争へ転
化させ、その「勝利」に導くために、我々は主体
的に、闘いの統一指針即ち「世界党」形成にむか
わなければならぬ。

地区ソブエトーマストは④国家権力と事業所占
撤の対峙⑤国家権力と地域バリケードの対峙⑥
国家権力と人民の武装の対峙の三点を構成要素
とする。その系列は対国家(地区解放区)、事業
所という関係である。同時に対中央権力(地域
バリケード)事業所占撤(至道斗争)の地域
的波及、地域バリケード対中央権力の交互作用
が働く(仏ソ同革命、ロシア二月、神田)。ガ
主導的なのは前者であり、一切の諸斗争をカカ
る意図性を持って貫徹することである。(10/2)

①東大(仏ソ同)、二山ロバ、左派内野は①
ML派の人民戦争(解放区運動)②中核派の無方
針の革マル派のゼネスト革命論③解放派のサン
チカリズム④四トロ、國權改選の取揚管理論が
対立する。ML派は解放区(中央権力と並載
し、方向性)を解放区運動は階級斗争の急進的
発展(対抗)を構想する。革マル派は
①唯一成功のモカソフ一党が社会主義を達成す
るまでも異約され、前記のものであつた如く、
たとえ産別ゼネストが社会主義に程差を出し
たとしても、権力の対峙関係から、革命的な急進
的斗争(討論会主義)を解する(でまてはな
らぬ)天のであること。②かかる事業所占撤斗争
は直別的に波及すると言え、丁度(収)の村
時をむかへ、革命の契機に転化するが故に、直別
的取勝を越え(地域)固態を本質とする。③権力に
対する攻撃的陣地としてのそれは、武装した地
域人民、地域工場(団結)政治的解放区(展
望)としての維持である。④(二山)革命の権力の
地域的であること上は、強つてゐる。

警察取勝を越え(対峙)展望(は)反合理化戦
略(解放区サンチカリズム)の取勝自己権力論の
誤りは明瞭である。
東大(神田、新典、東京警察斗争)の始まり
である。

⑤東大(ソビエト)革命の歴史(階級)となりつつも、日本
労働者階級(左)的部分的依然として右派(民
主)の指導下にあり、その勢は右派(民
主)に於ける指導の伸長としてある。民間基
礎(産業)に於ける指導の伸長は、全千、戦前(波
及)してあり、其(大)展望をもち、左(内)小(救)救(力)

我々は、地域(取揚)に於ける(激)進(派)斗争
とよつての(外)目的を(実現)し、(戦)列を(前)進(させ
る)ことを可能とする。

敵階級の(ア)ン(パ)ル(ソ)日本(共)産(党)革命(的)の
方向(は)員(会)う(社)会的(再)編(の)攻撃(の)性格(は)大
合理(代)作(業)長(体)制(再)編(一)取(制)支(配)料(を)
通(じ)て、(旧)軍(の)日(本)社(民)予(る)ゆ(ち)平(和)地
原(則)と(取)揚(斗争)を(解)体(させて)きた。日(本)社
社(民)労働(長)マル(クス)主義(の)自然(発)生的(左
翼)に(ネ)に(期)待(する)こと(は)幻(想)である。

(三) (中)を(有)う(反)帝(義)一(戦)線(同)社(民)の(再)編(は)
一(前)進(斗争)は(ソ)ビエ(ト)運(動)と(議)会(主)義(一
至)道(派)議(会)の(党)派(斗争)として(野)心(を)小(な
け)り(せ)ら(ぬ)は、議(会)秩(序)の(前)任(と)資本(と)の
中央(的)的(な)取(揚)斗争(の)互(殺)を(内)容(と)す
る(共)産(党)の(至)道(派)議(会)代(へ)の(方)向(と)、(村
村)力(斗争)一(平)場(斗争)一(占)領(斗争)の(地)域(的)結
合(を)現(在)的(に)創(造)する(ソ)ビエ(ト)運(動)の(斗)争
が(その)對(象)斗争(の)内(容)である。

二山(を)前(う)反(帝)義(一)戦(線)は(社)民(の)再(編)は(な
ら)ぬ(か)つ(権)力(斗争)を(前)う(か)故(に)、(前)任(免)の(指
導)一(取)揚(斗争)を(不)可(避)し、(政)党(間)決(定)と(地
也)及(戦)一(地)域(斗争)に(於)る(大)衆(的)統一(戦)線(と
を)結(合)し(て)ゆ(か)ゆ(は)ら(う)ら(ぬ)。

共(産)党(の)反(帝)義(一)戦(線)ソ(ビエ)ト(運)動(中)
核(心)を(な)ら(せ)り(せ)ら(ぬ)。

反戦斗争と朝鮮運動の階級的再注
その展開と基本方針

(1) 反戦青年委員会の形成過程と今日の課題

一九三五年、社会党、総評青対部、社青同中央本部の三者構成団体の呼びかけにより「反戦青年委員会」が発足された。この反戦委の組織性格は、パトナム、日露の二つの斗争課題を目標に賛同する。オハ「創意、自立、統一」の旗印の基に「行動に於ける一至五原則とする」ゆるやかな共闘組織であった。結成当時既民青の代表も出席して以来、その過程で「青学共闘の再開の要求」この反戦委は青学共闘の分裂を固定化するものである」といった理由を並べ、結集の不参加の態度を表明したのである。当初より社会党、総評は日共の青学共闘の大衆的政治方針に二ア行動に対抗する手段のもとに、この反戦委を提唱した。同年一ヶ月開始された北郷によるパトナム侵略戦争の拡大と高度成長の終焉から構造的な現人の突入は、生活の逼迫、パトナム侵略戦争への加担等の労働者大衆のうろ積する不満のエネルギーを行動化させる組織的環として反戦委に派に結集を可能にした。日韓条約の批准の段階において反戦委は公然と日本階級斗争に登場した。この事は六月年安保以後、初めての労働の共闘斗争として獲得された、これまで停滞していた反体制運動に新しい息吹きを創出した。この斗いは政府支那者と組合官僚とも驚かし、10、15斗争を危険なものとするタラ輪達は、一部単産の指令中止を行った。この社民指下部の官僚総制が打ちだされる事により、連戦上反戦委は商店林業状況に入り、完全無産マニに落ちた。たのである。斗いが旧来の枠を突破するや否、単産から反戦委を凸出させ、自然消滅、解体を促された。又これに積極的介入しては革命的左翼の論議流も日韓斗争の安保の二番せんじの敗北と、パトナム反戦の方針確立が明確に出来ず主体的対応の欠陥を余議なくした。「自己のうろ積るパトナム」その対英が叫ばれたが、10、21国際反戦デーは、総評民同の反戦ストがマスコミの盛りもの入りの宣伝による反戦ムードがふりまかれ日教組を軸とした公務員賃斗との行きあわせと活版、腐敗の佐藤内閣の制衡力ンパニア斗争にすりかえ、反戦ストを経済斗争の別し味のつまじし、全面的戦略タウンを行ない小ブル平和主義に解消する中で、再び反戦委の再結集が向われたが主体的力量ともあいまって状況への主体的対応は出来ずに終った。まことにホ一期反戦委の運動は、日韓斗争挫折と社民指下部の指し放棄と団体共闘の性格を強く、旧来の青学共闘の再編としてあつたかゆえに、生命をもたなく、自刃論を示したの

である。(2) ホ一期反戦青年委員会運動
(3) ホ二期反戦青年委員会運動

立場を鮮明にし、自らの主体的任務を、日本南回主権の侵略加担の策動を阻止する具体的行動提起の環こそ砂川斗争であった。この斗いを全国的結集をもつて現地斗争として実現をほかり、現地反対同盟の農民と固い結合のもとに「この米侵略機をパトナムに送るな」をかがげ、全国的政治集衆として、米軍基地ゲート前の戦斗の奥力斗争が全学連を先頭にしかつ反戦委の労働者によって担われた。この段階に於いて明確に地区反戦として登上、個人加盟方式の取組も布まって、地域の青年活動家集団が中核となり、斗いの新正地地平を切り開いたのである。特に現地指下部の無力化と斗争放棄という関係の中で、新たな社会的にホ三潮流として登上をつくりだした。この砂川斗争の全面的高揚の背景を媒介に、戦の左翼の激化、訪米の二つの田斗争をカロシアリア國主義に領導された階級的暴力の内実を堅持する事か奥のオトナム人民との連帯であり、国際階級斗争の新たな高揚の突破口を切り開いたのである。兵力の破壊法の適用をほねのけ、その斗いの波は、一月エンパラ障差阻止斗争に引きつられ、佐世保の現地奥力斗争を起票に、首都においては一頁に日比谷野音をうめつとすほと青年労働者が結集した事と成、地区反戦が組合単産の動員もたなくとも独自も行いける能力と力量を持つて来た事を明らかにしたのである。このエンパラ斗争は反核、反戦の直接的契機となつた。米西前回主義の先制的攻撃の総体に対しての反撃としてあり、特に核アレルシーをマヒさせ、日米反革命軍事行動強化の一環として国防自主防衛核持ちこみの攻撃としての性格に解決とレマ同われた。羽田エンパラ斗争の威力との階級的攻防戦は市民社会各部にまで階級的流動を巻き起し、日共、社会党のみならず、民社、公明党手で反核野党連合として下部の突上りも相まって、顔見世興業として政治過程に登場した。希に佐世保において無産者のラジカル労働者の玄派反核起爆、合法的防衛組合に組織された部分であり取場における取組の支配、組合の形骸化の二重の疎外要因を媒介にして、新正地政治形態を見出し、全学連に反戦委の斗いに合流し、みずから取場放棄を行ない斗いに参加したのである。この斗いの高揚は王子、成田斗争へと発展し、基地斗争は日共の基地ピクニック反米教育の卑劣野郎ではなくなり、もはや過去の物と戻った。王子斗争において、豊村の分解の進行は都市底辺カロシアリアを増文化させ、その未組織労働者が突起し、威力と直接的に攻防戦

を連日半日行つた事である。芦川一エンラー取
田の週程は、反戦委において戦略的斗いの基調の相
連区内包しつつも、最低限一致した行動を取つて
いた。しかし、一々の斗いが兵力との攻防関係に
おいて、強制的生命がかゝりある局面に入るや、戦
略と運動論、その基本戦術を切りはなすことほゞさ
はは陸路関係にあり、地区反戦委において論争がよ
り一層激化を不可避にした。デバ棒を含む兵力斗争
をめぐつて対立が必然化しつゝあつた。さうにヨシ
ヤシノン声明による(部分的な爆発止)和平提案を
媒介に、革命的左翼の諸潮流は多かれ少かれ混乱を
開始し、「ポストバトナム論」まで語られ、一挙に成
略の連日が行方方針、戦術のみならず、斗争課題の
設定の相違にまで発展し、その矛盾を露呈されたの
である。口頭反戦斗争の左右の分解が急速に押し進
められた。とくに四月段階においては、豊田ラッパ
ルに押縛における日軍撤去、米軍基地撤去、無条件
帰還を要求する斗いが米軍基地撤去十前における
大衆的坐り込みをもつた兵力斗争の展開、そこにカ
ーボン銃をもつた米軍の活動という新たな政治的緊
要關係の激化の斗いに披して、我々本土に於ける
斗いといかに展開するのかがこの問題の中心であつた。
此、その斗いの具体的方向性が明らかにならず「本
土復帰」「抑繩奪還等」という革命的左翼が抱くの中
で、反戦委運動は明確に遠征運動として遠征及戦に
系列化を促進してつゝたのである。また、この分裂
後に、組合幹部の統制をばねのり、圧倒的に青年部
支部、分会の組合展開決定をとりつて決起して公
断協(全通、全電通、労働、国防、東水、東電、都
取)等の取場の戦斗的勝者登上げ、組織内部への
波及―取場反戦として組織的定着化が図られ、こ
れに対して市民左派は再びこの路線への便乗する情
況が注目され、これが東京地評が地区反戦連絡会
議との一定の接近が社会同解放派を媒介とせしめ
られたのである。この事が意味するものは、まず第一に
10を以ての激動的な数ヶ月の斗いが、全人民的政治斗
争を領導する部隊、反戦II全学連が、その休養期に斗
いの展開で、兵力の弾圧の 에스カレートの下で組織
的力量がとられ、単なる大衆運動主義的に現在の階
級斗争の局面を突破出来ぬ問題が決定的に向われ
デバ棒を含めた全学連の向上的兵力斗争が一時中止
を余儀なくされた。このように一定の向退局面は、
先のバトナム和平をめぐる路線上の混乱とが二重
にかさなり合ひ、覚醒斗争が一面化されて展開が
行なわれた。これらの状況の中を勝者本位論を
とる全学連のデバ棒斗争右定を前提に、三派全
学連の最終的分裂の固定化も反映し、地評青年協
を軸とし、全反戦の構成左派グループと社青同

解放派ロックの基に、華マ止派をまさきと社青
傘下の勝者大衆の反戦、反安保の自然発生的エネ
ルギーに依存して、米タンII反合理化斗争路線のも
とに地評まで巻きこんだ運動と自稱し、その内閣は
この向地区反戦が果して来べき意識とその限界性を右
翼的に批判してカゴジヤを行われた。この直符的原
因は6占事件である。この事により地区反戦レバル
の分解を決定すけた。この分解はある意味において
は必然的帰結であつたかも知れないが内ゲバを待っ
た対立は諸階級の混乱の象徴である。また6占は全
反戦II東京地評左派への接近と革命的左翼の再編
とが二重に重なり合つて進行したのである。10を
突破口とした「10を」が地評傘下の勝者への
斗いの破反は、地評レバルに於ては、二れ自ら
左翼のボーズ的対応を積極的に押し進めて来た。被
達の動向は、反安保勢力の結集II七日参院選の勝利
を以て議院主義カンパニア路線とあつたに比して
とれを以て大衆吸引力をもつたが故に、逆に革命的
左翼の表出と分解を促し、奇妙な蜜月旅行が
5集念性格をもちたのであつたのである。

この二期反戦運動は、10をから王子斗争の現地、
東京斗争を基軸に大衆高揚を形成したが、バトナム
を敵から守保斗争への転換が図られ、一連の安保個
別関係に對する斗いが全般的に展開され、地域政
策斗争の展開と中央兵力斗争の結合が要求される段
階に入つたのである。二期反戦委運動は政治過程
に、この二期に對するラッパルな情振入の対応であ
り、この意識の認識として市民主義的要因をも内包
させつつ、戦斗的左派も存在する構造をもつており
街頭行動の戦斗化は、兵力の弾圧(「治安」)の 에스カ
レートもあいま、新日本国結の質が向われ来て
いるのである。また青丘勝者との反帝反戦部隊の私
大がエスレートに勝者連入の転換につながらることほ
口えたい問題をニカに動止場としていくかが向われ
ている。政治カンパニア集会和デモと云う組織運動の
形からの脱却を要求される。従つて二期反戦委運動
は、覚醒系列化運動と自然成長的運動と相互規定関
係を待った運動の時期といえよう。

この二期に對するラッパルな情振入の対応であ
り、この意識の認識として市民主義的要因をも内包
させつつ、戦斗的左派も存在する構造をもつており
街頭行動の戦斗化は、兵力の弾圧(「治安」)の 에스カ
レートもあいま、新日本国結の質が向われ来て
いるのである。また青丘勝者との反帝反戦部隊の私
大がエスレートに勝者連入の転換につながらることほ
口えたい問題をニカに動止場としていくかが向われ
ている。政治カンパニア集会和デモと云う組織運動の
形からの脱却を要求される。従つて二期反戦委運動
は、覚醒系列化運動と自然成長的運動と相互規定関
係を待った運動の時期といえよう。

